

幼児期の学びに関する日本と北欧の比較研究

本山 ひふみ

The Study of Comparison Japan with North Europe about Learning of Early Childhood

Hifumi Motoyama

要旨：福祉国家として知られる北欧のスウェーデンでは、保育の量的確保はすでに終え、質の向上を目指して取り組んでいる。その中では、イタリア・レッジョエミリアにおける保育実践の成果を基盤として活用し、テーマ活動を中心とした保育を行っている。そこで生まれた幼児の学びの姿を、教育的ドキュメンテーションを用いて、保育者間で共有して検討し、保護者へも発信している。

こういった取り組みは、今後日本の保育の方向性を探る上で、貴重な資料となると考え、視察を行うとともに、そこで得られた知見を日本の現状と照らすべく調査研究を行った。その結果、日本では、園生活における在園児の家族のかかわり状況がどうであるかが把握でき、さらに保育所と幼稚園との違いも明らかになった。

Keywords：幼児期の学び、日本と北欧、テーマ活動、教育的ドキュメンテーション
Learning of Early Childhood, Japan and North Europe, Theme Activity,
Educational Documentation

I. はじめに

わが国では、4・5歳児の9割以上が保育所や幼稚園に通っており、保育所・幼稚園・小学校の連携の必要性が議論される等、就学前の教育のあり方が注目されている。小学校における学習指導要領に匹敵する大臣告示である保育所保育指針や幼稚園教育要領では、幼児期は小学校以上の教育のように教科ごとに教育を行うのではなく、幼児の自発的な遊びを中心とした指導によって総合的にねらいを達成するものとしている。それを受けて各園では、保育課程（保育所）や教育課程（幼稚園）を作成し、具体的な指導計画を立てることになっているので、遊びを中心とした保育を行っている園もあれば、建学の精神を優先する園もあり、また絵画、習字、水泳、漢字、英語等の教室をもって教育であるとしている園も多数存在する現状である。

一方、少子化と言われながらも保育所への入所待機児童の存在が問題とされる背景には、従前からの3歳児以上に対する幼児教育の必要性に加えて、3歳児未満に関する保育需要が高まり続けているからである。女性就労が可能な都市部では、低年齢児保育の場の確保が重要な政策となっている。低年齢の保育需要に応えられるよう平成18年10月から始まった認定こども園制度は、平成27年4月開始の子ども・子育て支援新制度の中で一層の拡充が求められている。日本の保育の現状は、保育の受け皿確保で躍起になっている状況である。低年齢の乳幼児に対しては保育士の配置基準が高いため（0歳児3人に保育士1人、1・2歳児6人に保育士1人）、現時点では保育士不足であり、一部の都市では保育士の引き抜きが問題にされるほどである。

しかし、保育需要の高まりも、ある一定の所で打ち止まるであろうし、この先いずれ受け皿確保が一段落した後には、量的問題より質的問題の重要性が取り沙汰されるであろう。また質的拡充こそが乳幼児の発達を促し、ひいては国民の幸せにつながっていくことであろう。大学における保育者養成教育は、

学生の卒業後のおそらく最大40年以上の職業人生を支える基盤となるものである。

現状に満足せず、見直しをもって教育に当たるべきと考える。本研究では、すでに量的確保を終え、質的転換を図って就学前学校を生涯学習の出発点として学校体系に位置づけているスウェーデンの実情を調査し、就学前教育の制度と、幼児期の学びに関する考え方や指導法を参考にする。また、その中で見えてくる日本の持つ特徴を明らかにし、質的転換を図る礎を探ってきたい。

II. 研究の目的と方法

本研究は、福祉国家であるスウェーデンが、幼児期の学びについてどのように考え、実践しているのか、その概念や指導方法の実際について調査し、日本の幼稚園や保育所の現状と比較検討することを目的とした。

そのためにまず、スウェーデンが幼児期の教育を就学前学校として体系付けた経緯を把握した上で、その就学前学校の実際の様子を、違った特色を持つ3か所を視察することでつかんでいこうと考えた。さらにストックホルム大学のイングリッド教授を訪ね、ナショナルカリキュラムについて理解を深める。また、視察を通して見えてくる両国の保育の在り方の違いを、日本における質問紙調査によって裏付ける。

(1) スウェーデン保育の経緯及び、先進的な保育実践の把握

(2) スウェーデンにおける就学前学校の視察

① 野外保育園ムッレボーイ園 (平成26年8月26日)

② ウグラン就学前学校 (平成26年8月27日)

③ フェーボーデン就学前学校 (平成26年8月28日)

(3) スtockホルム大学子どもユース研究分野国際幼児教育コース・イングリッド教授を訪問
ナショナルカリキュラム等保育制度の資料収集 (平成26年8月29日) およびその後の検討

(4) 日本の保育所・幼稚園への調査研究「園生活における在園児の家族のかかわり状況把握」

調査対象：平成26年度に本学子ども福祉専攻2・3・4年生が保育所保育実習または幼稚園教育実習を受けた保育所77園と幼稚園68園の合計145園に質問紙調査を依頼した。

回収状況：平成26年12月5日に発送し、12月20日までに回答・投函をお願いし、115園から回答を得た (回収率79%) 内訳は保育所61園、幼稚園54園であった。

III. 研究の内容

1. レッジョ・エミリア市の保育実践から大きな影響を受けるスウェーデンの保育

(1) 歴史的経過

スウェーデンは王国であり、人口は約950万人、日本の1.2倍の面積に13分の1の人が暮らしている。中立的な民主主義国家であり高福祉、高負担が知られており、男女の平等が進んでいる。

白石淑江は著書「スウェーデン保育から幼児教育へ」(かがわ出版2009年)で、以下のことを示してきた。従来スウェーデンにはlekskola(幼稚園)とdaghem(保育園)があったが、1968年に保育施設調査委員会が設置され、公的保育制度の基本理念として「チーム保育」「異年齢クラス」「対話教育法」「遊びの重視」「テーマ活動」「親との協働」などが明確化された。さらに1975年には保育施設の一元化を果たす法律が施行され、あらゆる子どもに対し、525時間の無償保育保障として就学前学校に通う権利が与えられた。後に、6歳児を基礎学校の就学前クラスに移行し、それを無償教育とした。1996年に就学前学校の管轄が社会省から教育省に移され、5歳児以下の通う就学前学校とのカリキュラムの連続が着手された。両親の育児休業と保険制度の充実、短時間無償保育の適用により、0歳児は家庭保育が主流である。

(2) 保育内容について

1998年の教育法改正に伴い、学校庁から就学前学校ナショナルカリキュラムが提示された。これは2011年の学校法改正の際、部分的に改訂されたが、保育内容については、イタリアのレッジョ・エミリア市の保育実践から大きな影響を受けてきた。

マーガレット・カー「保育の場で子どもの学びをアセスメントする」(ひとなる書房2013年)に示されるように、イタリアのレッジョ・エミリア市の保育実践はニュージーランドでマーガレット・カーによってアセスメント理論として発達観の転換を提案してきた。それは幼児の「できないこと」に注目する保育から「有能さ(やろうとする、熱中していること)」に目を向けた保育への保育者の意識改革である。森眞理著「レッジョ・エミリアからのおくりもの」(フレーベル館2013年)にはレッジョ・エミリアの教育が初めて海外に紹介されたのがスウェーデンであった、と記される。

スウェーデンでは、1980年代に開催された展覧会を機にレッジョ・エミリアの教育実践に注目し、1990年までに2000人もの保育者を研修に送り出した。次いで1992年にレッジョ・エミリア・スウェーデン研究所を設立し、ローリス・マラグツツイの指導と保育者の協力で、スウェーデンの保育実践の質的改革に着手した(ストックホルムプロジェクト)。その取り組みの一つがドキュメンテーション作成に基づく研究会であり、その成果を踏まえて、伝統的なテーマ活動(プロジェクト活動)においてドキュメンテーションの活用が奨励された。さらに2010年のナショナルカリキュラムの改訂では「子どもの育ちや学びを観察し、ドキュメンテーションを作成して保育の振り返りと評価を行い、発展させる」と明記されるに至った。

具体的には、幼児の好奇心や探究心に基づくテーマ活動(プロジェクト活動)を継続的に行う中で、対話的に教育し、写真・動画・録音・メモ・造形・絵画といったドキュメンテーション(実践記録・記録文書)を用いる。その目的は、第一に保育者の実践の検討と発展のためであり、第二に保護者とともに子ども理解を図るためである。さらに第三に子どもが自分自身や自分たちの遊びを振り返り肯定的自己像を持つためであり、第四に保育の質の評価に関わる子どもの学びや進歩についての情報として存在する。(リリアン・G・カッツ『レッジョ・エミリアから何を学ぶか』「子どもたちの100の言葉—レッジョ・エミリアの幼児教育」より)

2. スウェーデンにおける就学前学校の視察結果

(1) 野外保育園ムッレボーイ園(平成26年8月26日視察)

野外保育園ムッレボーイ園を視察。高見幸子氏の通訳を介して、森の妖精の存在を元にした保育について説明を受ける。保育室は、年齢ごとに分かれているがそれぞれが3部屋ほど有し家庭のように作られている。(これはスウェーデンの標準であるため、他園も同じである。)一年の半分は凍る季節であるため、衣服の管理や着脱の為に十分なスペースが取られている。園庭も個人の広い庭といった感じであるが、すぐそばにある森に入ることを日常としている。我々も幼児と共に雨の中でも森で遊びを見つけ、植物や生き物の生活を考える時間を持った。

具体的場面として、雨の中の森では、保育者が木々の枝に綱を渡してブルーシートで簡易の屋根を作り、地面に防水シートを敷いてその上に皆で円になって座り、休息をとった。中央に保育者が風呂敷大の布を敷き、絵本を開き、小さな動物の人形と木の実を出して幼児をお話の世界にいざなった。その話は果実を餌として暮らす動物の話であった。休息後、再び遊び始めると子どもたちはアリの巣付近で走り回った。ほどなくして保育者が、アリの暮らしを考え、踏みつけないようにと注意を与えた。あとで聞くとところによると、これまで何度もその説明をする機会があったそうだ。アリに限らず、森の中で暮らす生き物への思いを保育者が示していくことの重要性を語ってくれた。自然環境との共生が可能になる教育の具体的なあり方を、我々は幼児教育の面から考えていく必要がある。まずは、保育者自らが自

然とともに暮らす生き物のあり方に思いをはせることが大切だと思う。

(2) ウグラン就学前学校 (平成 26 年 8 月 27 日視察)

指導主任ジェーン・デランデル先生より英語で園の特徴について説明を受ける。

この地域は都心部から地下鉄で 30 分ほど行った集合住宅地域で、付近には大きな会社や工場が控えている。この園は公立で、移民も多く、母語がスウェーデン語以外の何か国語にもわたり、園児の出入りも相当数ある。我々が視察した時期は新年度に当たったが、どの年齢の学級にも新入園の親子がいる。スウェーデンでは子どもが慣れるまでの数日を親子一緒に園で過ごすことが一般的であると知った。

園舎は 2010 年に建築されたドーナツ型の特徴的な物であった。円形の周囲に各保育室への入り口があり、年齢ごとの保育室が順に並ぶ中、2～3 歳児用のアトリエと、4～5 歳児用のアトリエが別々に設けられている。アトリエに用意されている絵画用具では、種類の違う絵の具、各色の紙や様々な筆、光のテーブルなどが整えられ、製作材料では、木の実や枝などの自然物、色々な形にカットされた木片、工業製品の部品のようなプラスチックや樹脂のパーツなど選びだしやすいように分類されている。また、プラスチック性の様々な形や容量の容器、物差し等の数量的感覚を養う遊び具が多く整えられている点が印象的であった。

指導主任の先生は、在籍児の出入りの多さだけでなく、教員の定着にも問題点を感じておられ、多民族による意思疎通の難しさが根底にあるのではないかと話された。

(3) フェーボーデン就学前学校 (平成 26 年 8 月 28 日視察)

高見幸子氏の通訳を介して、園長先生より園の組織と特徴をうかがう。高級住宅地域にあって人気の高い園であり、希望しても入園できないことも多い。周辺の環境は自然に囲まれ広々としており、すぐには民家が見えない上、園舎前が広い駐車場になっていることから考えても、各家庭から自家用車での送迎であろう。新年度であっても 1 歳児以外では保護者の姿は見られず、園舎内の雰囲気落ち着いている。平屋の園舎は 3 棟あり、それらが食堂やアトリエで結ばれる形となっている。

在園児の担任は基本的に 5 年間の持ち上がり 3 人態勢である。1 歳児は 15 人でスタートし、5 歳児までに徐々に増えて 22 人になる。現 2 歳児の担任二人が一昨年度卒園させた園児との 5 年間に及ぶ保育実践を紹介し保育内容についていくつも質問を受けていただき、詳しく理解することができた。特にドキュメンテーションを中心とした保育の在り方について各年齢でテーマとしてきた事柄や取り組みの様子をスライドで見ることができ、子どもを主体とし、さらに保護者を巻き込んだ保育の在り方を実感できた。(この保育実践は、平成 27 年 4 月 29 日に本学部の学術講演会として詳細を報告した。) この中で、幼児が自分の家の形に関心をもち、後にその模型から街づくりに発展するテーマ活動が紹介されたが、皆、戸建ての持家に住んでいるという。この前提条件があって初めて成り立つテーマであり、同様の取り組みをする際には、家庭のプライバシーや貧富の差への配慮も不可欠であることを感じた。

(4) 3 か所の視察を終えて

今回の視察では、地域性の違った 3 種の園を訪問でき、それぞれの特徴を感じることができたが、共通な点は、国で定められている 5 歳児であっても 20 名程度の幼児に対して保育者 3 人という人的環境の豊かさである。その上、年齢ごとの保育スペースにそれぞれの玄関があり、着替えの部屋があり、ごっこ遊びの部屋があり、休養の部屋がある点である。さらに保育室とは別に食事をする広めの部屋があり、普段の食事はその横にある厨房で作られる。しかも年齢ごとの保育室にも台所がついており、ちょうど家庭で保護者がするように、クラスの子だけに向けた調理もできるようになっている。また、保育室とは別にあるアトリエ (造形や音楽の場所) を 2・3 学年共通で有しており、そこには専門的な研修を受けた別の保育者 (基本資格は保育者である) が常駐する。そこでの活動は、曜日を学年で分けるなどして調整している。このように空間の豊かさ日本比ではない。

ちょうど新年度の時期であったため、新入園の親子の姿も見ることができたが、スウェーデンでは入

園して数日は、親子で園生活を送ることになっている。それは1歳児に限らずどの年齢からの入園であっても同様である。親子でここがどのような場所なのか探索し、他の親子とサムリングといわれる朝の会に参加し、それぞれが親子で自然に交わり、一緒に食事して、安心できる場所であることを実感するのだ。また、入園に当たって家族の写真を園に掲示したり、ファイルにまとめたりして、子どもが求める時に家族の写真を見られるように配慮されている。次第に友達との遊びが園生活の中心になってくるとあまり見なくなるようであったが、そのファイルはその後のその子どもの活動記録として、文書や写真が保管され、子ども自身や保護者がいつでも手に取って広げられるようになっている。このように、保育者のつくる環境は「子どもだけでなく保護者も入園した」と考えている。その分、園での活動に家庭生活との接点も多く、保護者が園生活に深くかかわっていくことも意図しているのだ。

また、最初に述べたようなテーマ活動への取り組み過程を、ドキュメンテーションの手法で掲示することは、幼児自身の振り返り、保育者間の共通理解や事例検討につながるだけでなく、保護者への活動過程の視覚的な情報発信ともとらえている。

さらなる特徴としては、自然物との触れ合いを大切にしていることがあげられる。日常的に森に出かける園、アトリエに材料として多種の枝や葉を備える園も見られた。これは国全体が、自然を大切にしていることの表れである。森を身近に求め、私有地であっても森は誰もが入ってよいことになっていると聞いた。また、景観への配慮も相当なもので、市街地には無粋な看板や電柱は無く、農村部では建物の色が統一されている。気候の違いによる人々の暮らし方の違いは大きく、様々な面で考え方にも影響しているだろうが、ここで学んだことの中から、現在の日本の保育観や、この先、日本が目指す幼児教育の姿が浮かび上がるように感じた。

3. ストックホルム大学イングリッド教授を訪問して収集した資料とその読み取り

視察旅行までに日本で得てきた知識、今回の3か所の園視察により感じたことを踏まえて、スウェーデンにおける保育者養成の在り方や、ナショナルカリキュラムについて説明を受ける。

スウェーデンでは1980年代までに保育の量的確保を果たし、その後1990年代からは質的充実を図っている。人道主義の観点から多くの移民を受け入れている現状からも、ナショナルカリキュラムでは理解と思いやりを中心に価値観の基礎と任務を定め、目標と指針を示している。2011年の改定を受けて目標は充実し、就学前学校における教育的活動と質的な発展の方向性が規定された。また、保育者は、学士の称号を持つことが求められ、別に高校卒業段階の試験で保育補助員の資格を持つ者との2段階構成となっている。指導計画作成の立場になれるよう、数年の保育補助員経験の後、大学で学ぶ者も多い。スウェーデンでは学び直しに際して、大人のための高校や大学があり、いずれも無料で受講できるという。

現代の日本では平成に入って以降、幼児期の教育を「生涯にわたる人格形成の基礎を培う」ものと位置づけ、徐々に保育者の幼児理解は深まってきているが、「保護者の求めに応じた時間割的保育の必要」を嘆きつつ実践する園も少なからず存在する。多くの幼児の側に立って暮らす保育者には理解できる幼児の「社会文化的に意味のある活動への参加」を「学び」ととらえる視座が、我が子だけと暮らす保護者にはつかみにくく、価値を見出し辛いものと映るのではないだろうか。

4. 日本における保育所・幼稚園への調査研究の結果と考察

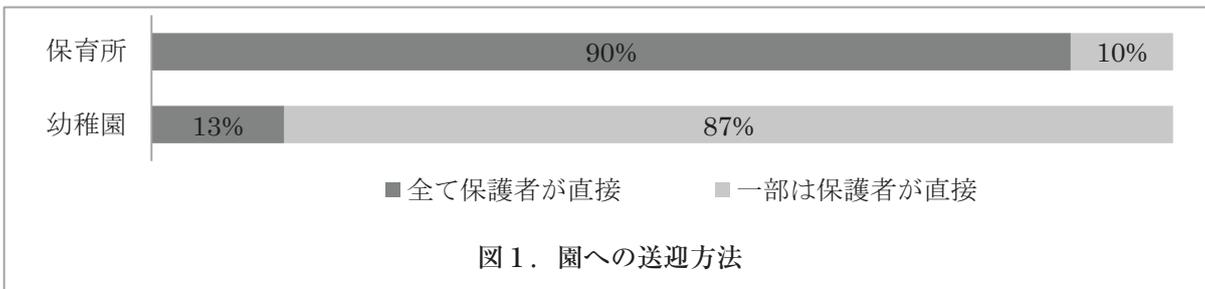
レッジョの保育を早くから取り入れてきたスウェーデンにおける保育視察及び保育制度把握で得た物理的条件は、今すぐ我々が取り入れることは困難であった。一方、視察中の保育者の「子の入園は家族の入園である」との言葉を、保護者意識改革の可能性のあるものと受け取った。

そこで、視察先の保育とは大きく相違が見られると経験的に感じている我が国の保育の特徴を、客観的にしたいと考え、質問紙調査によって園と保護者とのかかわり方を調査した。調査票の記入に当たっ

では「園の保育内容を実質的に指導する立場にある先生一人」にお願いし、回答者の立場も質問した。以下、質問内容は、園への送迎方法、入園当初の付き添い、家族写真の掲示、保護者の保育室入室頻度、保育への保護者の参加度合などを尋ねた結果が、文末に示す付表1である。これを基に保育所と幼稚園の相違、我が国とスウェーデンの相違といった観点から結果を分析していく。

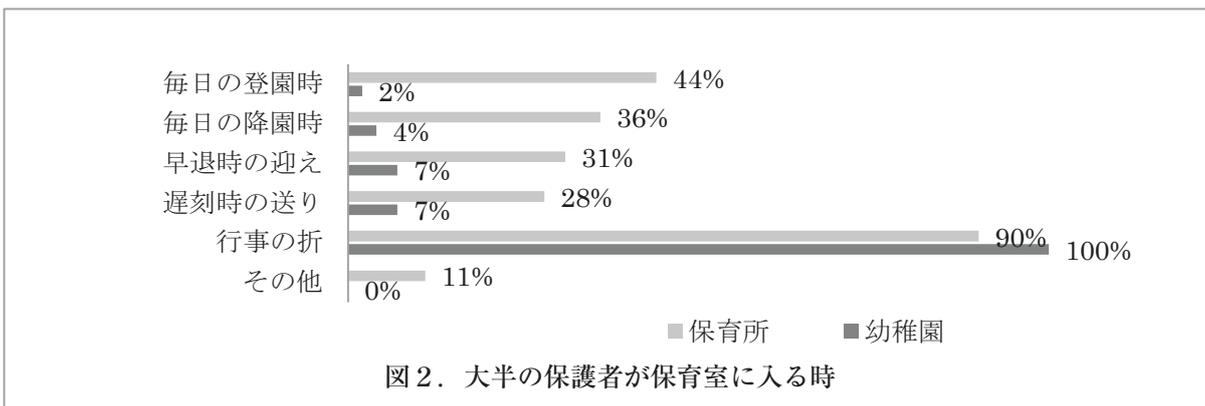
(1) 園への送迎方法

質問紙では、園バスによる通園児と、保護者による直接送迎の子どもの比を尋ね、さらに直接送迎の際に保護者は園のどこまで入るかを尋ねたが、様々なケースが出てきたため分析が困難になった。そこで、「全て保護者が直接送迎するか」「一部は保護者が直接送迎するか(園バスなどの間接送迎を含む形)」の2区分に整理したところ、図1の結果が得られた。保育所では園児を保護者が直接、送迎するのが一般的だが、幼稚園では通園バスの活用が多いため、直接送迎はかなり少ないことが明らかになった。直接送迎しないということは、園内に保護者が入らないということであり、どうしても普段の園生活へのかかわりは少なくなるであろう。



(2) 大半の保護者が保育室に入室する時

送迎時に園に入らない場合に、保護者はいつどのような形で園生活に関わるのかを調べるため、大半の保護者が保育室に入室するのはどんな時かを重複解答可として尋ねた結果が図2である。



先の結果でも見られたように保育所では登園・降園時に保護者が入室する機会が多いが、幼稚園では遅刻・早退時であってもかなり入室は少なく、行事の際の入室が一般的であるとわかった。

(3) 行事で保護者が保育室に入室する頻度

このように幼稚園では行事での保護者入室が一般的であるならば、その頻度がどの程度であるのかをつかんでおく必要があると考えた。その結果を図3に示すが、保育所では行事で保護者が保育室に入るのは「年に2～3回」という答えが最も多かったが、幼稚園では「年に6～7回」の回答が多くなっていった。おそらく普段保育室に入らない分、幼稚園では保護者が参加する行事の回数が多く、その機会に園生活を把握する、と考えているのであろうと思われる。

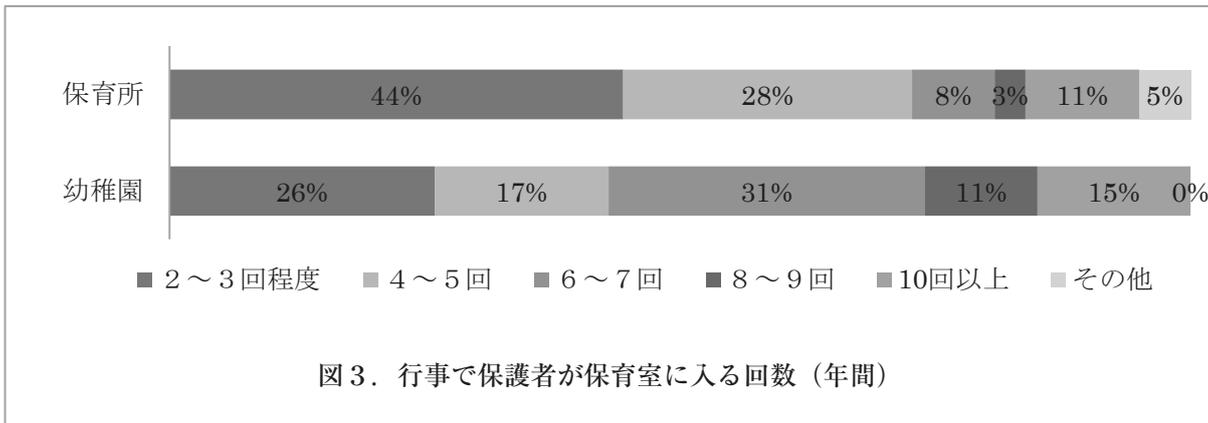


図3. 行事で保護者が保育室に入る回数（年間）

(4) 入園当初の保護者の付き添い

この質問に対しては、保育所と幼稚園で差は見られなかったので、付表1を用いて全体的に把握すると、「入園式翌日からまず無い」が74%、「不安定な子どもには当分の間」が14%、「特別に支援が必要な子どもなら」が7%、「付き添いを推奨している」が5%であった。先のスウェーデン視察で入園当初の数日を園で親子一緒に過ごして慣れる、という考えはあまり見られなかった。ごくわずか見られた「付き添いを奨励している場合があれば教えてください」と質問したあとの（ ）内に、記された回答を見ると「新入園にあたって、基本3日間の親子通園をしてもらいます」「0歳児クラスは2日ほど」というものがあった。また「0歳児、2～3日慣れていくための保育がありますが、個別で相談してすすめている」「個々の状態に応じて」という記述も見られ、日数がもう少し長い可能性も残っていた。

(5) 家族写真を保育室に掲示したことの有無

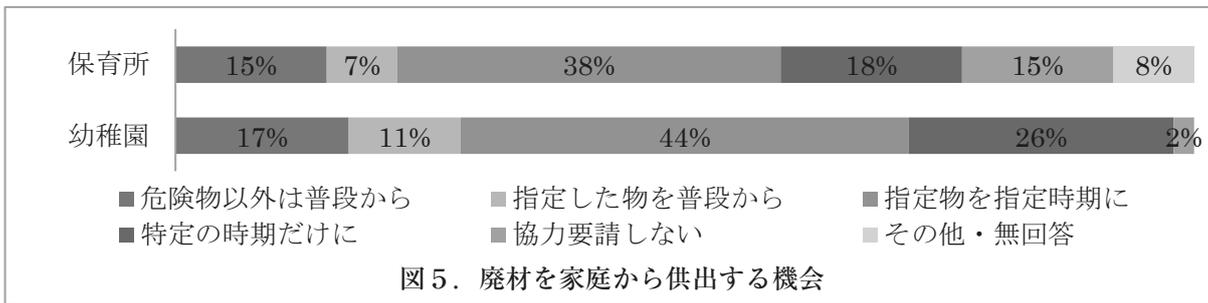
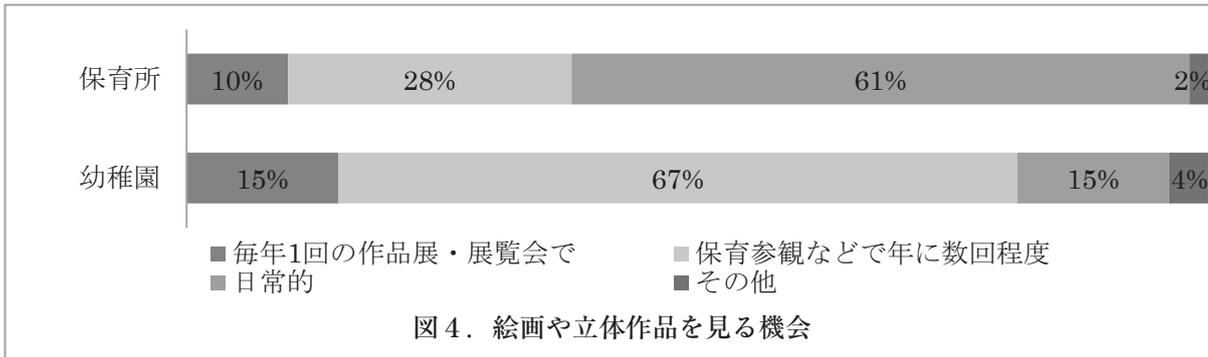
この質問に対しても、保育所と幼稚園で差は見られなかった。全体の合計数で示すと「まったく無かった」が86%、「掲示したことがある」が10%、「検討したが掲示しなかった」が1%であり、残りの3%がその他として記述していた。それは「父母の会が中心になり、ファミリー紹介カードを作ってもらった。職員も参加した」と「毎年掲示をします（保育室ではなく遊戯室の前）」という記述であった。数値としては、家族写真の掲示は一般的とは言えないが、意識的に家族写真を掲示する園も出てきていることがわかった。

(6) 保護者が幼児の絵画や立体作品を見る機会、家庭から廃材を供出する機会

幼児の活動内容をうかがわせる一助として、幼児の絵画や立体作品が存在するが、保護者にはそれを見る機会がどの程度あるのかを尋ねたところ、図4の結果が得られた。また、作品作りを意識しないまでも、日常の製作活動では「廃材」と呼ばれるような本来の目的を終えた空き箱や包装紙が、幼児の活動に応じて必要となるが、家庭に協力を要請しているかどうかを尋ねた結果を図5に示した。

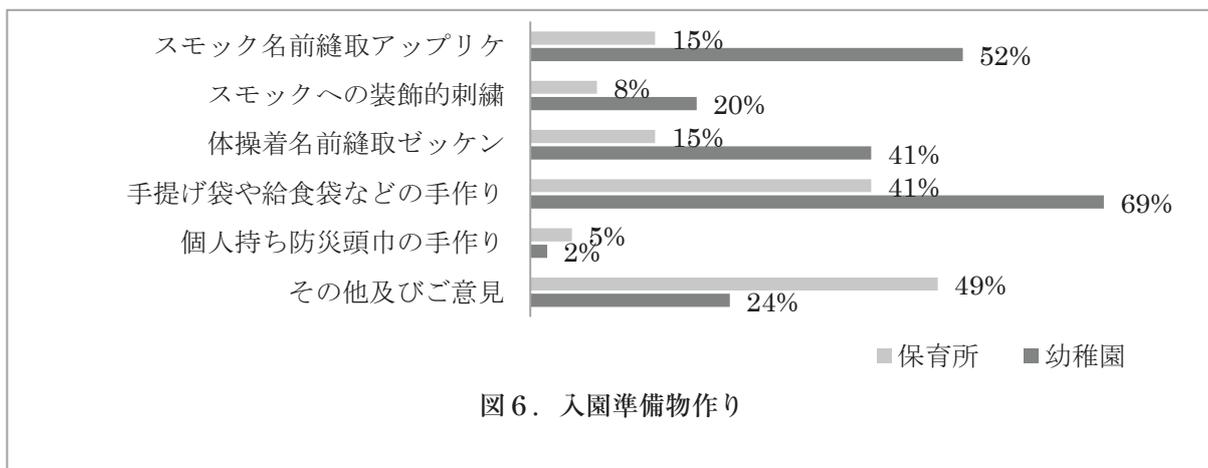
まず、見る機会に関しては、先の図2、図3にも通じるところであるが、保育所では「日常」をその機会としていることが多く、幼稚園では「保育参観などの行事」をその機会としていた。

次に廃材の供出要請については、保育所、幼稚園共に「指定物を指定時期に」が一番多く、次いで「作品展の前など特定の時期だけに」が二番目に多い、同傾向を示していた。しかし、「特に協力要請しない」に関しては、保育所で15%、幼稚園で2%と差が見られた。これは保育所での生活には必ず給食があるため、牛乳パックやヨーグルトカップを集めやすいことと、ひとり親家庭や共働き家庭への負担感をなくそうとする配慮の両因があると考えられる。



(7) 保護者に依頼する入園準備の物づくり

今回の視察の中で、入園時の受け入れ姿勢に日本との違いを多々感じたが、ここで日本的な特徴を数値として示したいと考えて、この質問を行った。重複解答可であるが、図6に示すように保育所では41%の園で袋物の手作りが求められており、他の項目はそれより少なかった。しかし、幼稚園では、その項目は69%に達し、さらに「スモックへの名前の縫い取りやアップリケ貼付」が52%となっていた。伝統的な幼稚園文化の中に存在した、母親の裁縫技術の披露ともいえる面が、現在もある程度受け継がれていると言えよう。なお、この質問では「その他及びご意見」の欄への記述が多かったので、今後分析を行い、保護者のかかわりのあり方を考察したい。



入園準備製作として、視察先では柔らかい布製の「幼児自身の人形」（体長20cm程度）を求めている園があった。幼児はこれを自分だけの玩具として安定して遊んだり、自分自身として遊びに参加させている様子であった。日本では個人持ち玩具より、個人所有の袋や衣類などの園生活に必要な生活用品に手をかけてもらう傾向があると言えよう。

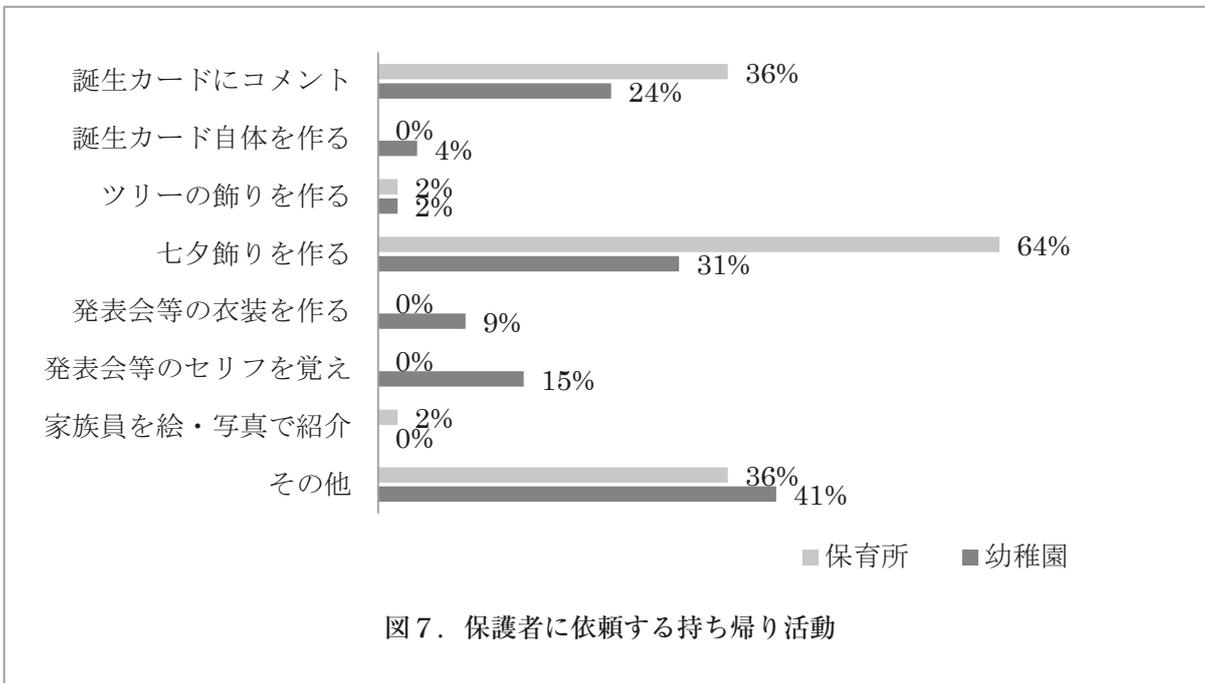
(8) 保護者に依頼する持ち帰り活動

在園期間中に保護者に依頼する事柄として、これまでの経験の中で見聞きした日本的と思われる事柄

を選択項目にあげて重複解答可で集計した。選択項目にあげたもののうち、「クリスマスカードにコメントを記入する」「クリスマスカード自体を作る」「家の形や様子を絵・写真で紹介する」「幼児の愛用品を絵・写真で紹介する」の4項目は、全く選択されなかったので図から外した。このうち前者2項目は筆者の実体験であったが、大変な思いをしたので現在のゼロ回答に安心した。また、後者2項目はスウェーデンで見てきた実例であったが、やはりこの調査結果では皆無であった。

選択された項目を図7に示すが、「七夕飾りを作る」において保育所と幼稚園に大差が見られた。七夕は中国由来であるが、今も日本で盛んに行われている。幼稚園は3歳児以上の「つくり遊び」できる時期の子どもを対象とするので、園での保育の中で取り上げることが多い。しかし短冊の願い事など、まだ字が書けない段階の子ども一人ひとりに対応しようとすると保護者の協力を求めることになるのだろう。これに対し、保育所は乳児からを保育の対象とするので、まだ「つくり遊び」できない段階から飾ろうとすれば保護者負担となる。また、幼児自身に意味が分からなくても、保護者側の願いを短冊に書くこともできるので、保護者には負担感ばかりではないかもしれない。とはいうものの、保育活動としての意味に再考の余地はあると考える。

同様に、幼稚園の回答で少なからず得られた項目に「発表会等の衣装を作る」9%、「幼児が発表会等のセリフを覚えてくる」15%があった。これらの園では、幼児が衣装を工夫したり役の言葉を考えたりする機会を持っていないことになる。行事への取り組みが、本当に子ども主体の保育内容になっているかどうか、行事を通して幼児に何を育てたいのか、そもそも行事と普段の保育の関係はどうあるべきなのか、といった点を、吟味する必要があるものである。



視察先では年度替わりとなる夏休みに、家族向けの課題として「子どもの好きな物紹介」や「家の製作材料集め」など、長期休業中も家族皆で園生活の主体となって取り組む意識付けが促されていた。このようなアプローチがあることを知ることで、視座を変えられるように感じた。

IV おわりに

幼児の学びについて、わが国の保育所や幼稚園ではどのように考え、実践しているか、それを北欧と比較することで、幼児の学びの指導課題を検討することを、大きな目的としてこの研究に着手した。今

回は、スウェーデンの幼児教育の概念や指導方法を知り、また実際に視察を行う中で感じ取り、そこから我が国の保育についての問題を意識し、調査研究を行った。その結果、わが国では保護者の園生活への関わり方にスウェーデンとは違った特徴を持ち、それが保育内容にも影響を与えている可能性に気づいた。また、乳幼児の有能さに着目する保育者の発達観転換には他者との意見交換が欠かせないことや、保育者が得た幼児の学びの姿を保護者に発信する方法も、まだまだ工夫できる可能性があることがわかった。我々が担う未来の保育者を養成する教育の中では、現実的な対応にとどまらず、先を見据えた保育の質の向上を目指した教育内容を追求していきたい。

謝辞

本研究においては、スウェーデンストックホルム大学の先生はじめ、各保育施設の先生方、通訳、本学学生実習先の保育所、幼稚園の先生方など、多数の方にご協力いただきました。

また、平成26年度愛知淑徳大学研究助成の補助を受けた研究（研究代表：本山ひふみ、共同研究者：岡田泰枝・白石淑江）であることを付記し、関係各位にお礼申し上げます。

参考文献

白石淑江「スウェーデン保育から幼児教育へ」かもがわ出版 2009年

マーガレット・カー著、大宮勇雄・鈴木佐喜子訳「保育の場で子どもの学びをアセスメントする」

ひとなる書房 2013年

森真理「レッジョ・エミリアからのおくりもの」フレーベル館 2013年

白石淑江・水野恵子「スウェーデン保育の今」かもがわ出版 2013年

C・エドワード、L・ガンディーニ、G・フォアマン編、佐藤学・森真理・塚田美紀訳「子どもたちの

100の言葉—レッジョ・エミリアの幼児教育」世織書房 2001年

大宮勇雄「学びの物語の保育実践」ひとなる書房 2010年

付表1. 園と保護者のかかわり調査結果

		合計数 115園	(115園 中%)	内訳			
				保育所		幼稚園	
				実数61園	(61園中%)	実数54園	(54園中%)
回答者	理事長・園長	69	60%	39	64%	30	56%
	園長補佐・教頭	9	8%	4	7%	6	11%
	主任(統括)	33	29%	18	30%	15	28%
	学年主任	2	2%	0	0%	2	4%
	その他	1	1%	0	0%	1	2%
種別	法人・個人立の保育所	29	25%	29	48%	0	0%
	公立の保育所	31	27%	31	51%	0	0%
	法人・個人立の幼稚園	45	39%	0	0%	45	83%
	公立の幼稚園	8	7%	0	0%	8	15%
	法人・個人立のこども園	0	0%	0	0%	0	0%
	公立のこども園	0	0%	0	0%	0	0%
	その他	2	2%	1	2%	1	2%
送迎方法	全て保護者が直接	62	54%	55	90%	7	13%
	一部は保護者が直接	53	46%	6	10%	47	87%
入園当初 保護者付き添い	入園式翌日からまず無い	85	74%	46	75%	39	72%
	不安定な子には当分の間	16	14%	8	13%	8	15%
	特別に支援が必要な子	8	7%	3	5%	5	9%
	付き添いを推奨	6	5%	4	7%	2	4%
家族写真 の掲示	まったく無	99	86%	51	84%	48	89%
	掲示したことがある	12	10%	8	13%	4	7%
	検討したが掲示せず	1	1%	1	2%	0	0%
	その他	3	3%	1	2%	2	4%
	大半の保 護者入室 する時	毎日の登園時	28	24%	27	44%	1
毎日の降園時		24	21%	22	36%	2	4%
早退時の迎え		23	20%	19	31%	4	7%
遅刻時の送り		21	18%	17	28%	4	7%
行事の折		109	95%	55	90%	54	100%
その他		7	6%	7	11%	0	0%
行事で保 護者が保 育室に入 る回数	2～3回程度	41	36%	27	44%	14	26%
	4～5回	26	23%	17	28%	9	17%
	6～7回	22	19%	5	8%	17	31%
	8～9回	8	7%	2	3%	6	11%
	10回以上	15	13%	7	11%	8	15%
	その他	3	3%	3	5%	0	0%
子どもの 絵画や立 体作品を 見る機会	毎年1回の作品展・展覧会で	14	12%	6	10%	8	15%
	保育参観などで年に数回程度	53	46%	17	28%	36	67%
	日常的	45	39%	37	61%	8	15%
	その他	3	3%	1	2%	2	4%
壁面を装 飾する際 の主体者	基本的に保育者	2	2%	0	0%	2	4%
	基本的に幼児	55	48%	33	54%	22	41%
	保育者や幼児の作品(合作含む)	55	48%	26	43%	29	54%
	無回答・無装飾	3	3%	2	3%	1	2%
廃材を家 庭から供 出することあるか	危険物以外は普段から	18	16%	9	15%	9	17%
	指定した物を普段から	10	9%	4	7%	6	11%
	指定物を指定時期に	47	41%	23	38%	24	44%
	特定の時期だけに	25	22%	11	18%	14	26%
	協力要請しない	10	9%	9	15%	1	2%
その他・無回答	5	4%	5	8%	0	0%	
保護者に 依頼する 持ち帰り 活動	誕生カードにコメント	35	30%	22	36%	13	24%
	誕生カード自体を作る	2	2%	0	0%	2	4%
	ツリーの飾りを作る	2	2%	1	2%	1	2%
	クリスマスカードにコメント	0	0%	0	0%	0	0%
	クリスマスカード自体	0	0%	0	0%	0	0%
	七夕飾りを作る	56	49%	39	64%	17	31%
	発表会等の衣装を作る	5	4%	0	0%	5	9%
	発表会等のセリフを覚え	8	7%	0	0%	8	15%
	家族員を絵・写真で紹介	1	1%	1	2%	0	0%
	家の形や様子を絵・写真で紹介	0	0%	0	0%	0	0%
	愛用品を絵・写真で紹介	0	0%	0	0%	0	0%
	その他	44	38%	22	36%	22	41%
入園準備 物作り	スモック名前縫取アップリケ	37	32%	9	15%	28	52%
	スモックへの装飾的刺繍	16	14%	5	8%	11	20%
	体操着名前縫取ゼッケン	31	27%	9	15%	22	41%
	手提げ袋や給食袋などの手作り	62	54%	25	41%	37	69%
	個人持ち防災頭巾の手作り	4	3%	3	5%	1	2%
	その他及びご意見	43	37%	30	49%	13	24%